
風の中の自由

一条 灯夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の中の自由

【Nコード】

N7138S

【作者名】

一条 灯夜

【あらすじ】

日増しに悪化してゆく戦争。水上機の搭乗員の主人公が見た、第二次世界大戦。

プロペラが生み出す風が、水面を揺らして吹き抜ける。発動機の音は、悪くない。だがそれも、今の時勢としては、だ。湖面に並べられた、たった六機の零式水戦に、昔日の航空隊の勢いは無い。それもそのはずだ。下駄履きなんぞよばれるこんな機体が、どれほどの戦果になるというのか。それに、あんなことがあった後では――。夕日が湖を朱色に染め、波の穂先に太陽の残滓が踊る。

湖畔に微かに見える日本とは違う町並み、切り立った山々、流れる水、強い風。それらが織り成す風景は、それとして見るなら敵かなんだと思う。だが、もはやそれに心を動かされる余裕など、誰にも無いはずだ。

「搭乗員搭乗確認」

「爆弾懸吊ヨーシ」

翼に乗った整備兵が大声を上げる。良く機体を持たせてくれているとも思うし、いつそ全機ぶっ壊してくれば良いのにも思う。

右手を挙げ、操縦桿を軽く動かし、フットレバーを浅く蹴る。

「尾翼動作確認ヨーシ」

そう言って、翼の上から整備兵が飛び降り、水飛沫が微かに俺の顔にも掛かった。

「一番機離水せよ！」

拡声器を片手に、詰襟の士官が叫んだ――と、言っても、発動機のおかげで大して聞こえはしないが。

俺は敬礼をすると、機体の速度をゆっくりと上げていった。両翼に取り付けられた浮舟が、水面を滑る様に進んでゆく。基地の仲間が帽子を振る姿を、目の端に捉えていた。

そして、機首を上げ大空へと飛び立った。地上からは、この夕日の中でも日の丸の朱が見えてるのか、と考える。もっとも、今更そんなものが見えたところで、士気なんて上がりはしないんだが。大

陸からの風を捉え、沖縄へと進路を取った。

——淡水基地からの出撃はこれが最後と聞いた。昨日の特攻志願書が頭に浮かぶ。熱望に丸を付けたのは、死にたいわけでも、日本の勝利を信じているわけでもない。他の選択肢を選んだ所で、何も変わらないことを知っているだけだ。

それは、同じ飛行気乗りの全員に……いや、兵と下士官の全員に共通する思いだろう。

「やりきれんな」

自分の声が耳に聞こえて、口に出していたかと思ひ苦笑いをする。俺も、もうじき三十だ。開戦から今日まで戦えば、それは老けもするだろう。

後部座席の佐久間少尉が、訝しむけはいがあったから「旋回機銃の試射だ」と、ややぞんざいに声を上げた。

同じ少尉といえど、操練出の自分よりは、予備学生の佐久間少尉の方が一応上になるので、より上の海兵出身の士官に見つかればただじゃ置かれないが、まあ、今はいいかと、思う。

「はい！」

後部座席からは、気を悪くした風の無い十代の年相応の幼い声が返って来る。

それから、7・7ミリの鈍い音が聞こえた。

「試射、問題なし」

「よし」

答えて、俺はまた前方の空を見た。

大地はすでに終わり、広々とした海面だけが広がっている。黒くうねる海と、太陽が沈んだ後の紫色の空。雲が少ないのは、奇襲の確率が減るのでありがたかった。それに、予備学生は速成訓練しか受けていないので、視界が悪ければすぐにでもはぐれる。上手く編隊が組めないのは仕方が無いとしても、バラバラに沖縄に着いて各個撃破されるだけなのは、御免だ。

今回の任務も夜間爆撃、この夕日だと今夜の天気は綺麗な星空に

なりそうだ。

敵は良く見えるが、敵もこちらを見つけやすい。その条件の有利不利を考えるなら、敵に圧倒的に有利に働く。敵の方が、戦力に勝っているからだ。

「沖縄までは後半分だ、低空を一気に抜ける。気を抜くなよ」

幸か不幸か、機体の調子は良い。上手く風を凪いでくれる。嫌な振動も、操縦桿の重さも無い。

死ぬ気は無かった。

でも、生き残れるとも思っていなかったと思う。

「敵飛行場視認！」

一気に高度二千まで上昇する。急降下爆撃で二百五十キロ爆弾をかまして一気に逃げる算段だ。

ただ、敵の迎撃が相当数上がっているのが、蠢く夜の闇の濃淡から見て取れた。

「後ろから二機来るぞ、撃て！」

空戦フラップの釦を押しながら叫んだ、急降下爆撃の姿勢に入る。目標、敵燃料補給車。

視界が急速に狭まり、目の端の景色がものすごい速度で流れる。空気抵抗に機体が揺れ、地上からの対空砲火の花火もあちこちで咲いている。何発かくらった気配がする、弾が機体に当たる嫌な音は意外と耳に響くから。

「投下！」

20ミリ機関砲の機銃掃射を、照準もつけずにかけながら、爆弾を投下した。戦果確認をする余裕は無い。閃光があちこちに見え、一瞬照らされる景色が後方へ遠ざかる。

急降下で斜め後ろから迫る、ずんぐりとした機体。ギリギリまで引き付けて、失速寸前までスロットルを絞り機体を横に向け、滑りながら旋回してかわす。

最高速度四百k m/hの下駄履きで――、果たして振り切れるか。一気に加速して、左右にぶれながらも何とか機体を制御して加速する。地面すれすれを海岸線に向かって飛んだ。

敵機は、基地防衛のために、未投下の爆撃機が目標らしく離脱する俺たちの追撃は殆ど無かった。

「古仁屋に向かう、損害は？」

海上に出て、それでも低空飛行を続けながら、後部座席に問いかけた。

「左翼側浮舟に被弾していますが、おおむね問題ありません」

「よし、どうだお前は敵を落としたか？」

「わかりません！」

まだ実践経験が浅いためか、興奮冷めやらぬ口調で佐久間少尉は答えた。

「そうかあ」

古仁屋で補給を済ませたら、淡水基地に帰る前にもう一度沖縄を爆撃しなければならない。

気が付けば、半欠けの月が空と海面に浮かんでいた。降る雪というよりは、雲の様に星が空を覆っていた。真っ暗な海の上、上下の星を見ながら飛んでいると天の川の中を飛んでいる気がする。

「あの」

後ろからおずおずと掛けられた声。佐久間少尉から話し掛けて来るのは、珍しい。まあ、同じ位でも、お互いに階級の上下や年の差から話し難いのだと言うことは、想像に難しくないが。

「志願、されましたか」

泣きそうにも聞こえる声に、佐久間少尉の若さが見えた。

「よせよ、敬語なんぞ。同じ少尉だろう、基地の士官にぶん殴られるぞ」

はぐらかすようにふざけて言った俺に「はい」と、声を落として言った佐久間少尉。

「……志願した」

微かに溜息をついて、俺は答えた。

「勝てますよね？」

「学徒出陣の佐久間少尉は、俺なんぞと違い、偉い学校を出てるんだろう？ そのくらい、分からんでどうする」

冗談っぽく俺は言ったが、冗談にしては出来が悪すぎるくらいに分かった。ただ、他に言い方は無いとも思ったが。

佐久間少尉から、答えは帰ってこなかった。

——貧しさから入った軍であつたが、そこで空を知った。幼い頃は、見上げるだけだった空が今は両手の中にある。風を受けて、どこまでも速く高く遠く。

……多分、初めて飛んだ日から、ずっと空に魅せられていたんだと思う。戦場の空でもそれは変わらない。

到底自由とは言えない空、けれど俺は自分の意思で飛んでいる。何のために？

……ただ空が好きだった。

——そして、俺達は九州へと移り八月十五日を迎えていた。

鳴り響く蟬の声、陽炎が揺らめくだけの滑走路。山々は清廉を湛えているのに、瓦礫の燻ぶる町並みは

「これからどうされますか？」

玉声放送の後、兵舎の軒下の日陰で座っている俺の下に、佐久間少尉が来た。

結局、本土での特攻準備中に終戦。俺達は生き残っていた。

「お前は どうするんだ？」

複雑な顔の佐久間少尉に、質問を返す。

「はっ！ ひとまず故郷へ戻りたいと思います」

「それがいいだろう、元気だな」

「あの」

「頑張れよ」

何か言いたそうな佐久間少尉に、そう俺は言った。

「……はい」

小さく頷く佐久間少尉。

「まあ、お前さんの人生も、戦争のせいですいぶんと変わったんだろうがな」

少し笑いながら、俺は佐久間少尉の目を見て言った。

「……大丈夫ですか？」

不安、というよりは、心配そうに佐久間少尉が問いかけてくる。

佐久間少尉の方が若いのに、俺の心配をしているつもりらしい。まったく、そんなのは十年早い。

「ああ。まあ、お偉いさんは保身に一生懸命だからな。佐久間少尉も身に覚えの無い責任をとらされるなよ」

「はい。……でも、大本営は、栄えある帝国軍人として、この国を守る政治交渉の為に動かれているのでは？」

「少尉、ひとつ教えよう。お偉いさんは、そんなこと考えんさ。連中が一番惜しいのは、自分の命であり財産だ。そもそも、命令すれば、家でも街でも立つし、まして人なんぞ、ほっといても増えるぐらの考えで、ちんけな法律一つで国はまとまると信じている。……が、俺達はそうも行くまい。瓦礫と土を掻き分けて、死に物狂いになって復興しなきゃいかん。俺よりも若い佐久間少尉の方が大変だぞ」

一気に言い切って、佐久間少尉の肩をポンポンと叩いた。

「綾部少尉は——」

「俺には空しかない、一緒に来るか？」

佐久間少尉の言葉を遮って、俺はおどけて言った。

「……」

佐久間少尉は、複雑な顔で黙ってしまった。

「気にすんな！言っただけだ」

カラカラと笑って、俺は歩き出した。

「空が広いな」

蝉の大合唱を受けて、空を仰いだ。水平線に、入道雲が立ち上っている。照りつける日差しが眩しくて、かざした手。その隙間から大空へと飛び立つ鳥の背が見えた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7138s/>

風の中の自由

2011年6月3日21時55分発行